

其の日は朝から冷たい雨が降って居た。

夜、僕は野暮用で<sup>アベット</sup>住処を出た。  
傘を差し、雨の道を歩く。  
不意に前方に白い影を視て、立ち竦んだ。  
眼を凝らす。

…少女だった。道の真中、傘も無しに天を仰ぐ少女。  
長い黒髪も白の<sup>ワンピース</sup>衣袋もすっかり濡れて肌に貼り付いて居た。  
何事か呟いてる様だった。  
何者かに哀願してる様にも見えた。

だから、内容を聴き取ろうと、僕は一二歩近付いた。

「…だから私を殺して。私を犯して私を孕ませて肚を裂いて子宮と臓腑を滅茶滅茶に攪拌して引き摺り出して墮胎させて一片の躊躇も無く無惨に汚して壊してよ。御願い。御願いだから犯して犯して」  
蒼白な顔、<sup>チアノオゼ</sup>青紫に鬱血した唇で少女は必死に呟いて居て。  
其処で漸く、<sup>からくり</sup>絡繰人形の如き<sup>うごき</sup>挙動で僕の方を向くと。  
凍てついた<sup>かお</sup>美貌に、魔性の笑みを浮かべたのだ。

足元に何か転がった。僕の傘だった。  
麻痺した思考。暴力的衝動。  
知らず僕は、<sup>アスモデウス</sup>目前の女悪魔に向かって雨の中、又更なる一步を踏み出していた。